HAL open science

ドゥナン（与那国）語の言語使用

Masahiro Yamada, Thomas Pellard

To cite this version:

Masahiro Yamada, Thomas Pellard. ドゥナン（与那国）語の言語使用. Takubo, Yukinori. 琉球列島の言語と文化：その記録と継承 Ryūkyū rettō no gengo to bunka: Sono kiroku to keishō [The languages and culture of the Ryūkyū archipelago: Their recording and transmission], Kuroshio shuppan, pp.93–107, 2013, 9784874245965. ⟨hal-01289786v2⟩

HAL Id: hal-01289786

https://hal.science/hal-01289786v2

Submitted on 21 Apr 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

Distributed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License

山田真寛・Pellard, Thomas. 2013.「ドゥナン（与那国）語の言語使用」田窪行則（編）『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』93–107. 東京：くろしお出版.

ドゥナン語（与那国語）の言語使用

山田真寛・Thomas Pellard

1 与那国島概説

ドゥナン語[*1] [*2](与那国語) は与那国島 (沖縄県八重山郡与那国町) で話されている琉球諸語の一つである。琉球諸語は北琉球諸語と南琉球諸語に大きく二分され、南琉球諸語はさらに宮古諸語、広域八重山諸語に分けられる。ドゥナン語の分類には諸説存在するが、八重山諸語とともに広域八重山諸語に分類されると考えられる (ローレンス 2008; Pellard 2009; 2015)。

与那国島は東経約 123 度、北緯約 24 度、台湾と石垣島の中間に位置する面積約 30km^2 の東西に長い楕円形の日本最西端の島である (国土地理院ウェブページより、http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/CENTER/kendata/okinawa_heso.htm, 最終アクセス日 2013 年 5 月 13 日)。祖納 (そない: とぅまいむら)、比川 (ひがわ: んでぃむら)、久部良 (くぶら: ドゥナン語同名) の三つの集落が、それぞれ島の北東岸、中央南岸、西岸にある。久部良は島外からの移住者が多い集落で、ドゥナン語話者の大部分は祖納と比川に居住している。祖納と久部良は約 7km、比川は他の集落から約 5km 離れており、各集落を結ぶ道路および島を一周する舗装道路 (一部は県道 216, 217 号) がある。祖納と久部良には比較的大きな港があり、与那国空港が祖納と久部良を結ぶ道路のほぼ中間にあり、役場などの行政機関は祖納にある。小学校は各集落に一つずつ、中学校は祖納と久部良に一つずつある。

[*1] 本稿は筆者が「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書」(国立国語研究所、一部木部暢子、下地賀代子と共著) として報告したものをもとにしている。本稿執筆にあたり、与那国町教育委員会、与那国中学校、また多くの与那国島民の方にご協力いただいた。心より感謝申し上げる。

[*2] UNESCO の消滅危機言語として登録されている言語名は Yonaguni であるが、本稿では話者が自分たちの言語を指す時に用いる「どぅなん-むぬい (与那国-言葉)」にしたがって、ドゥナン語と呼ぶ。

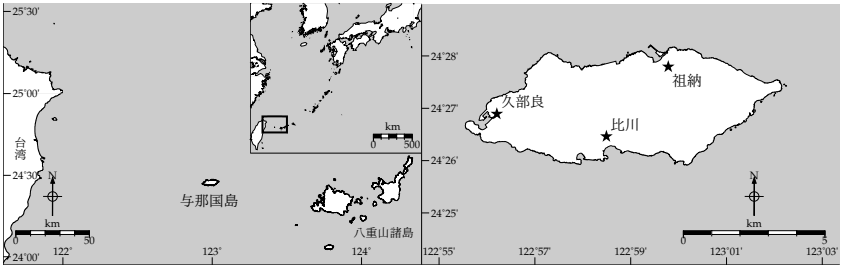

図1 八重山諸島、台湾と与那国島の位置関係　　図2 与那国島の集落

琉球諸語が話されている他の島の状況とは異なり、祖納および比川で話されている方言は相互理解が可能であり、管見の限りでは若干の語彙的差異をのぞき大きな差はないようである。よって本稿では両方言を総称してドゥナン語とし、主に祖納集落における言語使用を報告する。

2 ドゥナン語話者数

与那国町の「人口および世帯数調表平　成 22 年 10 月」によって各集落の人口が、「年齢別人口集計表　平成 22 年 10 月 29 日処理」によって与那国町全体の年齢別人口がわかる。ドゥナン語を日常的に使用する者は 50 歳代後半の島出身者に限られ、それより若い世代で日常的に方言を使用する者はほとんどいない[*3]。集落ごとの年代別人口はわからないため、以下の仮定に基づいてドゥナン語の話者数を算出すると、2013 年 1 月末現在で 405 人となり、祖納と比川の人口の約 38%、与那国町全体の約 26% となる。ドゥナン語話者算出に関する仮定

i) ドゥナン語話者は祖納・比川集落の 55 歳以上の住民全員とする。
ii) 島外からの移住者の多い久部良集落の住民と祖納・比川集落の 55 歳未満の住民は全員ドゥナン語話者ではないとする。

祖納・比川集落にも島外からの移住者がいるが、久部良集落にもある程度話

[*3] 異なる年代の島民による学校の同窓生や先輩後輩の方言使用感覚に基づく情報であるが、これまで聞き取り調査に協力いただいた方全員がほぼこの感覚に一致している。

者がいるため、この仮定に基づいて算出された話者人口はある程度実際の数字に近いものと思われる。なお、沖縄本島や日本本土などにも多くの話者が存在するが、家族で移住している場合をのぞきドゥナン語を使用している可能性は低く、ここでは与那国島在住の話者に限って報告する。

ドゥナン語話者の算出[*4]

$$
\begin{aligned}
(55\text{ 歳以上人口の割合}) \times (\text{祖納} + \text{比川集落の人口}) &= \text{ドゥナン語話者数} \\
(134 + 199 + 141 + 101 + 13)/1560 \times (958 + 117) &= 588/1560 \times 1075 \\
&= 0.377 \times 1075 \\
&= 405\ (\text{人})
\end{aligned}
$$

与那国島の特徴として、40 歳代半ばより若い世代に島外から嫁いだ女性が多くいることがあげられる。このような異なる言語の話者間による婚姻は、家庭内での方言使用率低下の一因となる。ドゥナン語は他の南琉球諸語とも相互理解が不可能なため、異なる言語を話す夫婦間では現代日本語共通語が用いられている。子どもたちは家庭外でもドゥナン語に触れる機会が極端に少ないため、このような家庭の子どもは日本語共通語のみを母語とすることになるのである。

離島に散見される若年層の島外流出は与那国町にも見られるが、原因の一つとして島に高校がないことがあげられる。また与那国町人口動態を見ると、3 月から 4 月にかけての転出が多く、島全体の転出者の数は高校進学者数よりもはるかに多い。これは子どもの高校進学を機に家族そろって島外へ転出するためとの見方もある (田中 2011: 7)。総じて与那国町の人口は減少傾向にあり、したがって現在全体の約 3 割程度を占めるドゥナン語話者人口も減少傾向にある。後述するように、ドゥナン語話者は中高齢者に限られ、若年層への言語島全体の伝承は途絶えている。

3 教育

ドゥナン語話者は全員現代日本語共通語とのバイリンガルであり、1960 年代の調査報告 (平山・中本 1964 など) には「日本語共通語を流暢に話す方」と

[*4] 計算式中の数字はそれぞれ 55–60 歳、61–70 歳、71–80 歳、81–90 歳、91–100 歳、101–110 歳の人数。

いった記述があるが、現在では 90 歳代の方も現代日本語共通語のみでの会話にまったく不自由はない。与那国町教育委員会によると、昭和 40 年代 (1960 年代) 頃まで方言札による共通語教育が行われ、学校でのドゥナン語使用が禁止されていた。また、戦時中は日本語共通語話者が理解できないドゥナン語を使用することが軍事的理由により禁止されていた。

現在与那国町のすべての教育機関で使用されている言語は現代日本語共通語のみであり、ドゥナン語使用は奨励されていない。祖納集落には与那国保育所、与那国幼稚園、与那国小学校および与那国中学校があるが、ドゥナン語教育が授業の一環として行われているのは与那国中学校のみである。ここでは同校のドゥナン語教育について概観する。

与那国中学校のドゥナン語教育は 2009 年から六コースある総合学習の一つ「方言コース」としてはじまった。(2010 年度、2011 年度の選択者は全学年合わせて三名 (全校生徒約 50 名))。方言コースでは地域コミュニティーから一名ドゥナン語話者を講師として招き、ドゥナン語による演劇を 11 月初旬の総合学習発表会に向けて週二時間練習することを主な目的とし、生徒によっては日常会話や単語などの習得も行っている。講師は毎年祖納集落の各部落 (東、西、島中の三つ) 持ち回りで、2009 年度と 2011 年度は東部落、2010 年度は西部落から講師を招いた。東部落には伝統芸能の一つである狂言が残っており、伝承者が手書きした狂言台本がドゥナン語で書かれているため 2009 年度と 2011 年度は狂言の一つを演劇として行った。一方西部落では狂言伝承が途絶えたため、2010 年度は「南東昔話業書 10 与那国島の昔話」(岩瀬 他 1983) より「32 難題蔵較べ (語り手、目差ウナリ)」(pp.148–150) を題材にした方言による演劇を練習した。

総合学習方言コースは、ドゥナン語の習得を目的とした語学教育の授業ではなく、ドゥナン語の演劇を練習するコースである。講師は台詞一つ一つの大まかな意味を説明し、単語や形態素などの説明はほぼ行わない。教師の中にはドゥナン語教育を指導する者がおらず、またドゥナン語習得用の文法書や教科書もない。しかし、方言コースを選択した生徒の祖父母の中には、生徒が家庭で身の回りのものの方言名を頻繁に聞くようになったと語っている。総合学習方言コースはドゥナン語習得は目的とされていないが、ドゥナン語に興味を持つきっかけになっているという側面もある。

4 言語の保存・伝承・記述

地域コミュニティーによる言語の保存・伝承活動などは行われていないが、ドゥナン語話者による言語記述がいくつか存在する。またドゥナン語が用いられる伝統芸能では、「座」と呼ばれる組織による伝統芸能の伝承の一部として、言語資料 (口頭伝承を含む) が保存・伝承されている (祖納集落の座については田中 2011参照)。また年間約 40 回行われている大小の祭祀の祈りの言葉もドゥナン語で読まれるため、祭祀の伝承とともにドゥナン語による祈りの言葉も保存・伝承されている。しかしどちらの場合も、台詞、歌詞の伝承が主なため、日常会話としての言語使用が次世代に伝承されているわけではない。田中 (2011)の報告によると、祭祀を担当する司またはその補佐役もドゥナン語話者同様減少しており、現在与那国町在住の司はおらず、石垣へ嫁いだ司一名が大きな祭祀のときのみ与那国へ戻ってきている。小さな祭祀は各部落の公民館館長および公民館役員が司の代理を立てながら運営しているので、司の減少がそのまま祭祀の減少に直結しているわけではないが、今後の祭祀運営が危ぶまれている。また祭祀運営にとって重要な座の構成員も減少傾向にあり、したがってある種の言語伝承を含む伝統芸能の伝承も危ぶまれている。しかし、地域コミュニティーによって三線の教本などが作成され自費出版されている他、与那国町工芸館において草木染から機織りまでの与那国花織りの伝承、池間苗氏個人による与那国民俗資料館など、伝統文化保存の取り組みは地域の中でむしろ積極的に行われている。これらの活動に関わっている方々は、みなドゥナン語の保存・伝承にも関心を持ち、筆者の言語調査にも快く協力してくださっている。現在ドゥナン語の保存・伝承活動は行われていないが、伝統文化の一部として、今後しかるべき企画があればそういった活動が地域コミュニティーの中で行われることは期待できる。

地域コミュニティーによる言語資料として、与那国民俗資料館館長の池間苗氏による「与那国ことば辞典」(池間 1998) と「与那国語辞典」(池間 2003) があげられる。それぞれドゥナン語 – 現代日本語共通語、現代日本語共通語 – ドゥナン語の語彙集[*5][*6]である。また、出版物ではないが、東部落狂言座元師匠に

[*5] 語彙数は明記されていない。また動詞の活用形が別々に採録されているため正確な語彙数は数えられないが、およそ 6,000〜10,000 語程度ある。

[*6] 語彙集はこの他に高橋 (1975)、吉元・吉元 (1981)がある。高橋 (1975)は簡単な文法記述も含む。

よる 16 の狂言台本の書き起こしがある。与那国町教育委員会が作成した「与那国島の植物」(与那国町教育委員会 1995) には島に自生する植物の和名、学名に加えてドゥナン語名が記載されている。

これら地域コミュニティーによる資料は、日本語の平仮名と片仮名で書かれているが、確立された書記法が存在しないため、それぞれ独自の書記法を使用している。現代日本語共通語の正書法では表記されない (または音素として存在しない) いわゆる喉頭化音や軟口蓋鼻音 (鼻濁音) などは、「与那国ことば辞典」と「与那国語辞典」では独自の表記が概ね一貫して使用されているため、言語学者による再建が可能である。狂言台本と「与那国島の植物」では喉頭化音などの音が現代日本語共通語の似ている音と区別されていない。「南東昔話業書 10 与那国島の昔話」(岩瀬 他 1983) は地域コミュニティーによる編集ではないが、ドゥナン語話者が物語の語り手として参加している。ドゥナン語の語りを現代日本語共通語の平仮名と、漢字に読み仮名をふったもので表記しており、ドゥナン語特有の音は表記されていないが、約 200 ページに渡り 57 の物語が現代日本語共通語訳とともに記録されている。形態素ごとの訳は付されておらず、現代日本語共通語訳は意訳である。

発音記号を用いた談話の書き起こし・形態素ごとの訳・現代日本語共通語訳の資料として平山・中本 (1964)、加治工 (2004)がある。加治工 (2004)では約 25 ページの談話のアクセント標記付きの文字化およびその解説が収録されている[*7]。平山・中本 (1964)には短い談話資料と発音・アクセントが録音されたソノシートが付録されている。また「全国方言資料全十二巻」(日本放送協会 1999) は 1968 年に記録された談話資料を発音記号と逐語訳で文字化し、音声データとともに CD-ROM として出版されている。言語学的記述として、平山・中本 (1964)、法政大学沖縄文化研究所 (1987a,b)、平山 (1988)、伊豆山 (2002)、Izuyama (2012)、高橋 (1997)、上野 (2009; 2010; 2011)、法政大学沖縄文化研究所 (1987a,b)、Yamada et al. (2015)などがあるが、これらはドゥナン語の全体像を記述する参照文法とは呼べない。詳細は山田 他 (2013)参照。

[*7] 本文によると音声・映像資料も存在するようであるが未確認。

5 消滅危機の程度

以下では UNESCO の“Language vitality and endangerment” (UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages 2003) に沿って、ドゥナン語の消滅危機度を評価する。UNESCO では日本国内に 8 つの消滅危機言語を認定し、ドゥナン語はその一つに認定されている。Language Vitality Assessment (言語の体力測定) に従って、以下、筆者が行った調査に基づいての評価と、それぞれの項目に関する補足を報告する。なお、点数評価のない項目 II. Absolute number of speakers (母語話者数) は上で報告したのでここでは省略する。

I. その言語がどの程度次の世代に伝承されているか (ドゥナン語:2–3)
   5. 子どもたちを含むすべての世代でその言語が使用されている。
   4. その言語はすべての子どもたちが、一定の限られた場面で使用している。
   3. その言語は親の世代以上で使用されており、子どもたちは使用していない。
   2. その言語は祖父母の世代以上で使用されており、親、子の世代は使用していない。
   1. その言語は曹祖父母以上の世代で使用されており、ほとんどの話者は使用していない。
   0. その言語を使用するものはいない。

ドゥナン語話者を 55 歳代半ばとすると (脚注 3 参照)、この世代の子どもは 20 歳代以上のため、この世代は「親の世代」に近い「祖父母の世代」と言える。UNESCO のウェブページでは 3 の評価が与えられている (http://www.unesco.org/culture/languages-atlas/index.php last accessed Feb.5, 2011)。

III. コミュニティー全体に占める話者の割合 (ドゥナン語:2)
   5. 全員がその言語を使用している。
   4. ほぼ全員がその言語を使用している。
   3. その言語を使用している者が大半を占める。
   2. その言語を使用している者は少数派である。
   1. その言語を使用するものはほとんどいない。
   0. 誰もその言語を使用していない。

先に仮定・算出したとおり、ドゥナン語話者を 55 歳以上とすると祖納と比川の住民のうち約 38% が話者となる。しかし彼らも全員現代日本語共通語とのバイリンガルであり、ドゥナン語を日常的に使用しない者とは現代日本語共通語で会話する。ドゥナン語を話しはしなくても聞いて理解する世代との会話でも、しばしば現代日本語共通語、もしくは現代日本語共通語にドゥナン語語彙が混じったものを用いることが多い。

本稿は与那国町在住のドゥナン語話者のみについての報告であり、与那国町から転出している話者は把握していない。集団で移住した先でドゥナン語話者コミュニティーが形成されている可能性も否定できないが、未確認である。

IV. どのような場面でその言語が使用されているか (ドゥナン語:2–3)

5. その言語はすべての場面で、すべての目的のために使用されている。
4. 二つ以上の言語が、すべての場面ですべての目的のために使用されている。
3. その言語は家庭では使用されているが、支配的言語が家庭でも使われ始めている。
2. その言語は限られた場面、いくつかの目的のために使用されている。
1. その言語はごく限られた場面で使用されるだけで、機能的に使用されることはほとんどない。
0. その言語はどんな場面のどんな目的のためにも使用されていない。

UNESCO の基準にはうまく当てはまらないが、言語使用は主に家庭内や 55 歳代後半以上の住民同士の日常会話に限られる。当該年齢の住民でも、ドゥナン語を頻繁に使用しない者がいれば支配的言語、つまり現代日本語共通語を用いる。狂言などドゥナン語を使用する伝統芸能や祭祀といった、形式的に保存・伝承されている言語使用の場面も存在する。ここでいう形式的とは、日常会話など新しい表現を含む生産的な言語使用ではなく、保存されている文面を、暗唱する、もしくはそのまま読む場面を形容するものである。

V. 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか (ドゥナン語:0)

5. その言語は新たに生活に加わったどんな場面でも使用されている。

4. その言語は新たに生活に加わったほとんどの場面で使用されている。
3. その言語は新たに生活に加わった多くの場面で使用されている。
2. その言語は新たに生活に加わったいくつかの場面で使用されている。
1. その言語は新たに生活に加わった場面ではほとんど使用されていない。
0. その言語は新たに生活に加わった場面では使用されていない。

ドゥナン語によるテレビ・ラジオ放送などは存在せず、公的な場面では現代日本語共通語しか使われていない。また確立された書記法が存在しないため、新聞・文芸などドゥナン語による新たな生産も行われていない。話者の間では、ドゥナン語は日常会話に使用するものであり、文字にして何かを書くという考えが薄い。祭祀の祈りは昔から伝承されている決まったものであるはずだが、狂言など伝統芸能の中で新しい作品が作られる可能性もあり、今後の調査が必要である。

VI. 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか (ドゥナン語:2)

5. 確立された書記法と、伝統的な文法記述、辞書、文字資料、文学が存在する。行政、教育で使われる書き言葉がある。
4. 文字資料が存在し、子どもたちは学校で言語使用を学んでいる。行政の書き言葉では言語は使用されていない。
3. 文字資料が存在し、子どもたちは学校でそれに触れる機会がある。言語使用は推奨されてはいない。
2. 文字資料は存在するが、コミュニティー内の限られた者にしか利用されていない。あるものにとって文字使用は象徴的意味を持つことがある。言語使用は学校教育には取り入れられていない。
1. 書記法が存在することは知られている。それで書かれた文字資料がいくつかある。
0. 書記法は存在しない。

先に述べたように、ドゥナン語を書き記す者はあっても、それぞれ独自の書記法を利用している。池間 (1998; 2003) は、ドゥナン語特有の音もほぼ一貫して表記されているが、「与那国島の植物」や「与那国島の昔話」などのよう

に、特有の音素も書き分けられていないものも多い。語彙集は日本語の平仮名と片仮名を用いた表記のため日本語を解するものしか利用できないが、日本語話者であれば発音記号など特別な訓練を必要とすることなく利用でき、実際に与那国中学校の方言コースでも利用されている。言語学者によって記録された談話資料 (平山・中本 1964; 加治工 2004) はそのまま利用可能であり、岩瀬 他 (1983)の民話資料は、池間 (1998; 2003) や高橋 (1975)の語彙集によって元の発音を復元すれば利用することができる。

VII. 国の言語政策 (明示的、非明示的態度を問わず) (ドゥナン語:2)

5. 国内のすべての言語が保護されている。
4. その言語は保護されているが、主に家庭など限られた場面で使用され、公的には使用されない。
3. その言語に関する保護政策は施行されていない。公的場面では支配的言語が使用される。
2. 政府は支配的言語の使用を勧めている。その言語に関する保護政策は施行されていない。
1. 支配的言語のみが公的に使用され、その言語は保護や認知すらされていない。
0. その言語の使用が禁止されている。

おそらくドゥナン語は UNESCO のレポートによって初めて国に消滅危機言語として認知されたと言えるだろう。以前行われていたような使用禁止政策は現在行われていないが、保護政策や使用の推奨なども行われていない。日本語は公用語として明示的に認められてはいないが、公共教育はすべて現代日本語共通語で行われている。

VIII. コミュニティー内での言語に対する態度 (ドゥナン語:2–3)

5. 全員がその言語を大切にし、使用が推奨されることを望んでいる。ほとんどの者がその言語が次世代にも使われることを支持している。
4. 多くの者がその言語が次世代にも使われることを支持している。その他の者は無関心であるか、その言語が使用されなくなることを望んでいる。

3. その言語が次世代にも使われることを支持している者もいる。その他の者は無関心であるか、その言語が使用されなくなることを望んでいる。
2. その言語が次世代にも使われることを支持している者は少数しかいない。その他の者は無関心であるか、その言語が使用されなくなることを望んでいる。
1. その言語が使用されなくなることに関心がある者はいない。
0. すべてのものが支配的言語の使用を望んでいる。

コミュニティー内の感情の評価なので大規模なアンケート調査などなしには判断できないが、ドゥナン語は現代日本語共通語や他の琉球諸方言と大きく異なるという感覚を話者は持っている。禁止政策によって強制された「方言 (= ドゥナン語) は悪いもの」という感覚は薄れている。若い世代は全員現代日本語共通語のモノリンガルとなっているため、以前のようにドゥナン語を唯一の使用言語とすると進学や就職で苦労する、というような心配をする者はいない。逆に現在の親世代は、ドゥナン語を理解はするが話すことができない者が多いため、彼らの子どもがドゥナン語を理解することすら不可能なことを残念に思っている者も多い。またドゥナン語話者である祖父母世代は、伝統芸能のように言語も保存・伝承されることを望んでいるものが多い。しかし先に述べた一部の例外をのぞいて、保存・伝承に対して具体的なことはなされていないのが現状である。

IX. 言語記述の量と質 (ドゥナン語:2)

5. わかりやすい文法記述と文字資料が多く存在し言語資料が常に生産されている。高い質の録音、録画資料が存在する。
4. よい文法記述が一つある他にも、文法資料、辞書、文字資料、文学、それに定期的に更新される日常言語使用の資料が存在する。一定の質の録音、録画資料が存在する。
3. 一定の文法資料、辞書、文字資料が存在しうるが、日常言語使用の資料はない。録音、録画資料は、質の高いものも低いものもあり、文字化されているものやされていないものもある。
2. 限られた言語学的目的に利用可能な簡単な文法記述、語彙集、文字資料が存在するが、総括的なものはない。録音、録画資料は、質の

高いものも低いものもあり、文字化されているものやされていないものもある。

1. 簡単な文法記述、短い語彙集、断片的な文字資料がいくつか存在するのみ。録音・録画資料は存在しないか、利用不可能、もしくはまったく文字化されていない。
0. 言語記述は存在しない。

文法の記述に関しては、音韻、アクセントの記述の他、動詞形態論の記述などがある (平山・中本 1964; 内間 1980; 加治工 1980 など)。これらの記述は、ドゥナン語を現代日本語の方言とみなし、現代日本語共通語との違いはどこか、という視点で書かれており、ドゥナン語そのものの言語体系を純粋に記述するものはほとんど存在しない。言語学、言語教育に利用可能な、統語や意味の側面などを含むドゥナン語全体を記述する参照文法は存在せず、ドゥナン語を個別の言語体系として記述したものは平山 (1988)、Izuyama (2012),Yamada et al. (2015)などの簡易文法にとどまる。しかし語彙集や録音資料は先にあげたように、いくつか存在する。

以上の評価結果をまとめ、平均すると以下のようになる。

I.	言語がどの程度次の世代に伝承されているか	評価:	2–3
III.	コミュニティー全体に占める話者の割合	評価:	2
IV.	どのような場面で言語が使用されているか	評価:	2–3
V.	伝統的な場面以外で新たに言語が使用されている場面がどの程度あるか	評価:	0
VI.	教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか	評価:	2
VII.	国の言語政策 (明示的、非明示的態度を問わず)	評価:	2
VIII.	コミュニティー内での言語に対する態度	評価:	2–3
IX.	言語記述の量と質	評価:	2
ドゥナン語評価点平均:			1.75〜2.125

最も楽観的に評価した場合でも、UNESCO の評価基準によるドゥナン語の評価点平均は 2 ポイント程度となり、ドゥナン語は消滅の危機に瀕していることが明確である。

6 まとめ

ドゥナン語には日本語の歴史を考える上でも、また一般言語学的観点から見ても、非常に興味深い現象が数多く観察されるが、これらの記述・分析はほとんど行われておらず、ドゥナン語の全体像を知りうるような文法書も存在しない。話者人口の減少、世代間伝承の断絶、地域コミュニティー内での保存・伝承活動の少なさなどから総合的に評価すると、近い将来消滅する可能性が極めて高い。

地域コミュニティーで行われている祭祀と伝統芸能の保存・伝承の中に、ドゥナン語による祈りの言葉や狂言の台詞、唄の歌詞などが含まれている。これらの伝承が存続すれば、ドゥナン語のテキストが後世に残されることになる。しかし与那国中学校で行われている方言コースと同様、これらは生産的な言語使用の場面ではないので、方言の形式的な使用が若年層に伝承されたとしても、ドゥナン語に関する言語知識が伝承されるわけではない。なぜならこれらの文面は音の羅列と全体の意味の単なる記録であり、人間言語の特徴である有限の音・意味の対から無限の言語表現を生成するという創造性を含む活動ではないからである。

話者の中には、伝統文化の保存という意識のもと、ドゥナン語の保存・伝承を望む者も多くおり、確立された書記法が存在しない中、独自の書記法により語彙集やテキストを作成している者もいる。地域コミュニティーの希望があれば、彼らと外部専門家との協力によって、ドゥナン語を保存・伝承し、消滅の危機を回避することは現時点では不可能ではないと思われる。

参照文献

平山輝男（編）1988.『南琉球の方言基礎語彙』東京：桜楓社.

平山輝男・中本正智. 1964.『琉球与那国方言の総合的研究』東京：明治書院.

法政大学沖縄文化研究所（編）1987a.『琉球の方言 11：八重山・与那国島』. http://hdl.handle.net/10114/11991.

法政大学沖縄文化研究所（編）1987b.『琉球の方言 12：八重山・与那国島』. http://hdl.handle.net/10114/11990.

池間苗. 1998.『与那国ことば辞典』与那国町：池間龍一.

池間苗. 2003. 『与那国語辞典』与那国町：池間苗.

岩瀬博・松浪久子・冨里康子・長浜洋子. 1983. 『与那国島の昔話：沖縄県八重山郡与那国町』(南島昔話叢書 10) 京都：同朋舎.

伊豆山敦子. 2002. 「琉球八重山（与那国）方言の文法基礎研究」真田信治（編）『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究 (2)』(環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A4-012), 99–135. 吹田：大阪学院大学情報学部.

Izuyama, Atsuko. 2012. Yonaguni. In Tranter, Nicolas (ed.), *The languages of Japan and Korea*, 412–457. New York: Routledge.

加治工真市. 1980. 「与那国方言の史的研究」黒潮文化の会（編）『黒潮の民族・文化・言語』, 491–516. 東京：角川書店.

加治工真市. 2004. 「与那国方言について」『沖縄芸術の科学』16: 17–74.

ローレンス ウエイン. 2008.「与那国方言の系統的位置」『琉球の方言』32: 59–67. http://hdl.handle.net/10114/11867.

日本放送協会（編）. 1999. 『ＣＤ－ＲＯＭ版全国方言資料』全 12 巻. 東京：日本放送出版協会.

Pellard, Thomas. 2009. *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Paris: École des hautes études en sciences sociales. (Doctoral dissertation). https://tel.archives-ouvertes.fr/tel-00444150.

Pellard, Thomas. 2015. The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. In Heinrich, Patrick & Miyara, Shinsho & Shimoji, Michinori (eds.), *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, 13–37. Berlin: De Gruyter Mouton. https://doi.org/10.1515/9781614511151.13. https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01289257.

高橋俊三. 1975. 「沖縄県八重山郡与那国町の方言の生活語彙」藤原与一（編）『方言生活語彙』(方言研究叢書 4), 159–217. 東京：三弥井書店.

高橋俊三. 1997. 「与那国方言」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『日本列島の言語』, 873–882. 東京：三省堂.

田中聡子. 2011. 『与那国島祖納の祭祀組織の現状』西原町: 琉球大学 (卒業論文).

内間直仁. 1980. 「与那国方言の活用とその成立」黒潮文化の会（編）『黒潮の民族・文化・言語』, 447–490. 東京：角川書店.

UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages. 2003. Language vitality and endangerment. https://ich.unesco.org/doc/src/00120-EN.pdf (accessed 2 February 2011).

上野善道. 2009.「琉球与那国方言のアクセント資料 (1)」『琉球の方言』34: 1–30. https://doi.org/10.15002/00012516.

上野善道. 2010.「与那国方言のアクセントと世代間変化」上野善道教授退職記念論集編集委員会（編）『日本語研究の 12 章』, 504–516. 東京：明治書院.

上野善道. 2011.「与那国方言動詞活用形のアクセント資料 (2)」『国立国語研究所論集』2: 135–164. https://doi.org/10.15084/00000485.

山田真寛・Pellard, Thomas・下地理則. 2013.「ドゥナン（与那国）語の簡易文法と自然談話資料」田窪行則（編）『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』, 291–324. 東京：くろしお出版.

Yamada, Masahiro & Pellard, Thomas & Shimoji, Michinori. 2015. Dunan grammar (Yonaguni Ryukyuan). In Heinrich, Patrick & Miyara, Shinsho & Shimoji, Michinori (eds.), *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, 449–478. Berlin: De Gruyter Mouton. https://doi.org/10.1515/9781614511151.449. https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01289268.

与那国町教育委員会（編）. 1995.『与那国島の植物』与那国町：与那国町教育委員会.

吉元政吉・吉元初枝（編）. 1981.『いつまでも残したい与那国（どなん）のことば』那覇：吉元政吉.